

道徳教育研究会で学びました!

第60回道徳教育研究会は、岐阜県下4会場にて開催されました。もとす教育者道徳研究会は、7月28日(金)岐阜市メディアコスモスの岐阜会場に参加しました。参加者数66名中10名(15%)でした。本巢市立本巢中学校・岩井隆史校長先生はじめ5名の方と西濃地区からの4名の先生、計9名に参加費を出ささせていただきました。**感謝**

開会式は、馬淵校長先生(加納西小)の進行で、国歌斉唱後、岐阜県岐阜モラロジー協議会:臼井光昭会長の開会挨拶、公益財団法人モラロジー道徳教育財団・東海ブロック部長:三宅敏行氏による主催者挨拶がありました。全国各地68会場で開催されている紹介と参加者への期待を述べられました。また、岐阜市教育長:水川和彦様には、来賓ご挨拶として、共感的な歓迎のお言葉をいただきました。



開会挨拶
臼井光昭会長

主催者挨拶
三宅敏行部長



水川和彦
岐阜市
教育長

来賓ご挨拶



会場
風景

進行
馬淵勝弘先生
(加納西小校長)



第1講「この素晴らしい職」公益財団法人モラロジー道徳教育財団

生涯学習講師 遠藤 兵庫 先生

モラロジー生涯学習講師としての強い信念と豊かな教職経験が滲み出る語りでありました。

品性向上のために自己研鑽を

学校とは美しいもの、価値あるものを求め続けるところです。教育とは、不完全な教師が不完全な子どもと共に目標に向かって歩む事です。品性の向上をめざして教師が謙虚に学ぶ姿勢が、子どもに人間的な迫力となって感化するのです。東井義雄・森信三・糸賀一男など諸先生の書物から学び、教師という職を務め上げる事が出来ました。

子ども・学校・地域のために生きる喜び

欠点だらけの私をあるがままに抱き取り、生かしてくれる超越的な目覚め、深い感謝に裏打ちされた「心のよろこび」を体感した学びが自分の生き方を明朗清新なものに向かわせてくださったと思います。校長としてのこぼれ話をいくつか紹介させていただきます。

「校長の笑い声」は、職員を安心させ、勇気をもって子どもの前に出させる力になる。「校長先生の笑う声で勇気と安心をいただいた」と職員に言われました。校長は孤独ではなく、職員と共にあります。

「神輿と歩く」入学式の頃には祭りがあります。私は神輿と一緒に歩きます。「今度の校長さんは面白い人やな」と半日で校区に広がり、学校経営の半分は保障されたように感じた私の経験論であります。

「感謝と信頼」古いテントを処分するにあたり、寄付名簿を探し出しました。PTA会長さんと一緒に1軒1軒訪ねてお礼を述べます。20年前の寄贈者(会社)は驚きのご様子。この事が地域の方々の絶大な信頼をいただく基になったのだと確信しております。



講演中の遠藤先生

第2講「道徳科の特質を生かし、『考え、議論する』授業～いじめ教材をどう扱うか～」 岐阜聖徳学園大学教育学部非常勤講師

河合 宣昌 先生

河合先生は、道徳教育の研究者として岐阜県のみならず、全国的に有名なお方です。今回も豊富な実践を生かして具体的な講義をしていただきました。

道徳科は「不公平」「いじめ」の克服

道徳の時間の実施状況には地域格差がありました。公教育として不公平感が出来ないように道徳科が生まれました。いじめの件数で小学校が中学校を上回る状況になったことも大きな背景です。その期待に応える道徳科になる必要があります。

「考え、議論する」という道徳科のキーワードは「意見交流」！

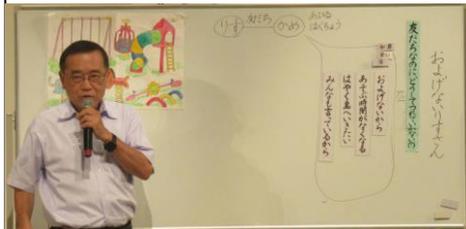
道徳科においては教材を通して、人間理解、価値理解を磨いていくという特質は変わりません。「考え、議論する」のワードが時代の流行とする先生の中には「討論する」との理解が見られます。私は、「意見交流」をして自他の考え方を広げ、より深く価値理解・自己理解をすることであると捉えています。道徳科の理想的な姿を求めるには、話し方の指導が大切と考えています。「私はAとっていたけど、〇さんの考えを聞いてBの考えに納得しています。今はBの方が強くなりました」の様な「話型」の基本を身に付けるのです。「話型」の指導は、全教育活動で育てていき、道徳科で花開くのが理想だと考えます。

いじめ教材を使った道徳科の授業展開例

今回は、サブタイトルの通り「いじめ教材」をどう扱ったらよいかを考えていきます。2つ教材を用意しました。



講演中の河合先生



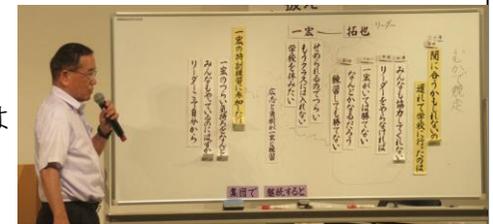
- ① 『およげないリスさん』 小学校
あひるとかめと白鳥が池の島へ遊びに行く相談中「ぼくも連れて行って」と頼むりすさん。「泳げないから

ダメ」と断られてしまいます。しかし「りすさんと一緒の方がやっぱり楽しい」と思ったので、「亀さんの背に乗せ、みんなで行くことになった」というお話です。「みんなで考えたい所」は「楽しくないと思う」場面が選ばれることでしょうし、いじめる側の理解を深めるのが「いじめ教材」の肝になります。「友だちなのにどうして連れて行かないの」と発問してみましよう。深めの発問は「どうして亀の甲羅に乗せて連れて行ったか」としてみましよう。子どもらしい様々な考えも出てくるし、「思いやり」の気持ちが深められます。教材から離れて、教師の豊かな日常観察から事例を紹介出来ると、きっと価値適用の場を広げることになるでしょう。

② 『むかで競走』 中学校

「伝統種目のむかで競走」です。拓也は優勝を狙うリーダー、一宏は運動が苦手な子。「一宏がいないと優勝出来るのに」と言われる中で、一宏のいらだちも募ります。一宏を励ます友だちとの特訓練習を見て拓也が加わります。当日は全員の足が揃ってゴール。準優勝に輝いたのでした。私は、「間に合うかもしれないのに遅れて学校に行った」拓也について話し、一宏たちの特別練習に参加した拓也について深めます。辛い思いをするメンバーへの思いやりに気づき合い、リーダーの自覚をした拓也に広く深く共感させたいのです。

※内容のまとめが独断的になりましたことをご容赦ください。



閉会挨拶 山口副会長

閉会式は、岐阜県岐阜モラロジー協議会：山口温朗副会長よりまとめていただきました。講義内容に触れながら丁寧なお礼を述べられ、「自らの品性を高め、子どもたちの幸せを願う」参加の先生方にも感謝の意を述べられました。結びに、岐阜県道徳教育奨励協会の実践募集を紹介されました。【文責・森山】